

## 「世の光」

ヨハネの福音書 8:12~40

### 1. 隠す

8:12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

「世」はヘブル語でオーラム(עולם)で「永続、永遠、大昔」という意味の名詞ですが、アーラム(עלם)「隠す、秘める」という動詞からできています。つまり「世の光」とは永遠の昔から隠された、秘められた光見えない光であると考えられます。そしてこのアーラムが聖書で初めて用いられるのがレビ記 4:13 です。

### レビ記

4:13 また、イスラエルの全会衆があやまっていて、あることが集団の目から隠れ、主がするなと命じたすべてのうち一つでも行い、後で咎を覚える場合…

このように、アーラムは「イスラエルに隠されて」いることを指しています。つまり世の光とは、「永遠の昔から、イスラエルの目に隠された光」若しくは「イスラエルの隠れた過ちを照らす光」と解釈することができます。イエシュアはここからますますユダヤ人たちの、イスラエルがいかに誤っているか、いかに見えていないかを明らかにしていけます。また光についてですが「光」はオール(אור)で、動詞の「光る」も同じ綴り、同じ発音です。神様を直接的に指し示す文字アーレフ(א)と釘を象り「固定する、定める」ことを意味するヴァーヴ(ו)、そして頭を象り「思考、計画、かしら」を意味するレーシュ(ר)が組み合わさった言葉であることから「神様が定めた計画」という意味が光、オールにはあると前に述べました。このように、「世の光」とは「永遠の昔から、イスラエルの目に隠された神様のご計画」という意味があると解釈することができます。

8:13 そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」

先ほどのレビ記 4:13 にあったように、イスラエルの民は誤っていて、真実が隠されているために、「世の光」を受け入れることができません。

8:14 イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」

「真実」と訳されているこのヘブル語はアーメン(אמן)です。アーマン(אמן)という「真実である、確かである」という意味の動詞からできた言葉で、これが聖書で最初に用いられるのが創世記 15:6 です。

### 創世記

15:6 彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

これは神様がアブラハムと交わした約束に対してのアブラハムの応答ですが、彼はそれを実際に目で見て「確かに真実だ」と思ったのではなく、全く体感することも見ることもなくただ「信じた」とあります。つまりイエシュアのこれらの証言は「信じる」べきものであって、見たり触れたりできるものではないということです。なぜならそれはアラム「隠されて」いるからです。

8:15 あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。

「肉によって」とは「人間的判断で」ということです。イエシュアはそのような判断を用いてさばくことはありません。

8:16 しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。

8:17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。

このように、イエシュアは「あなたがたの律法」であるモーセの律法を否定してはいません。肉によってさばくのではなく、「律法に…書かれています」と言われるように、むしろそれに則って語っておられるのです。それでも受け入れられないのは、やはりユダヤ人、すなわちイスラエルの目にはアラム、隠されているからなのだと思います。

## 2. 知る

8:18 わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます。」

8:19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」

「知る」はヘブル語でヤーダ(יָדָע)と言います。これが聖書で初めて使われているのが創世記 3:5 です。

### 創世記

3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」



これはサタンである蛇が、エバを誘惑して神様に背かせる場面ですが、日本語の文章では「神は知っている」という言葉が最後になっていますが、ヘブル語の原文を直訳すると「なぜなら、知っている、神は」という言葉が最初に記されており、強調されているのは、「あなたは知らない」が「神は知っている」つまり神様だけがヤーダである、「知っておられる」ということです。全てを「知っている」のは神様だけ、「知っている」という言葉は本来神様だけが使うことができる言葉、神様のものだということです。蛇はエバが「神のようになる」と騙しましたが、実際は自分が裸であることを「知った」と記されています。

### 創世記

3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

この「裸である」ということが黙示録でこのように表現されています。

### 黙示録

3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

神様のヤーダ「知っている」は、全てを知っていることを指しますが、人間のヤーダは、自分の弱さ、盲目さ、思慮や知識の乏しさ、つまり「自分がいかに知らない者であるかを知る」ということです。

### 3. 献金箱

8:20 イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

この献金箱と訳されているヘブル語は、オーツァール(אֹצֵר)と言い、旧約聖書では「宝物蔵、宝物庫」を意味するものです。これが聖書で最初に使われるのが申命記 28:12 です。

### 申命記

28:1 もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行ふなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上にあなたを高くあげられよう。

28:11 主が、あなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われたその地で、主は、あなたの身から生まれる者や家畜の産むものや地の産物を、豊かに恵んでくださる。

28:12 主は、その恵みの倉、天を開き、時にかなって雨をあなたの地に与え、あなたのすべての手のわざを祝福される。それであなたは多くの国々に貸すであろうが、借りることはない。

28:13 私が、きょう、あなたに命じるあなたの神、主の命令にあなたが聞き従い、守り行ふなら、主はあなたをかしらとならせ、尾とはならせない。ただ上におらせ、下へは下されない。

これは神様がイスラエルの民に語られた約束、すなわち神様のご計画である神の国、御国の成就を記した預言です。ここで「恵みの倉」と訳されているのがオーツァールです。神様はオーツァールを開いてイスラエルを祝福し、すべての国々の上に、かしらとならせることが記されています。イエシュアはこの約束を想起させるために、敢えて献金箱、いや宝物庫、オーツァールの前で語られたと考えられます。

そして「しかし、だれもイエスを『捕らえなかった』」とあります。この「捕える」もヨハネ 7:30 の箇所でも前述したターファス(טָפַס)であり、これは本来「上手く扱う、正しく理解する、」という意味の言葉ですか

ら、ユダヤ人たちがイエシュアの言葉の意味をターファスできなかつた、正確に理解し、捉えることができなかったことが表されていると考えられます。

#### 4. 初めから

8:21 イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」

8:22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」

「来ることができない」と何か拒絶しているように聞こえますが「来ることはない」、つまり来る必要がないのです。なぜなら来るのはイエシュアの方であり、ユダヤ人たちはイエシュアをこの地において「来て下さい」と待ち望む立場であるため「あなたがたは来ることができない」と言われたのだと考えられます。

8:23 それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。

上と下、すなわち天と地です。人は「下」である地のちりから造られた被造物です。しかしイエシュアは「この世」にある造られたものではなく「上」すなわち天において造った者、そしてそこから来られ、また再び来られる方、被造物ではなく創造主です。

8:24 それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」

死ぬのではなく「信じなければ死ぬ」のです。しかしイエシュアを信じればたとえ死んでも生きるのです。

#### ヨハネ

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

8:25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです。」

「初めから」神様が初めからと言えばそれはすべての初め、すなわち天地創造の初めからということです。日本語の聖書は「創世記」と訳していますが、ヘブル語ではベレーシート(בְּרֵאשִׁית)、その意味は「初めに」です。創世記から始まる聖書全体が、わたしについて書かれているのだとイエシュアは仰りたいのだと考えられます。

8:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」

8:27 彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかつた。

しかしイエシュアが「初めから」話そうとしていること、伝えたいことは、イエシュアご自身のことについて

ではありません。御子であるイエシュアが、御父である神様から遣わされ、そのご計画だけを伝える、そして実現させる存在であるということです。つまりイエシュアは御父のこと、御父のご計画を語っておられるのです。日本語では「父」と訳されていますがヘブル語ではアーヴ(אב), 神様を直接的に表す文字アーレフ(א)と家を象った「家族、国、国民」を意味する文字ベート(ב)が組み合わさった言葉です。すなわち「父」アーヴには「神の家、神の国」という意味が表されているのです。それをこの時のユダヤ人たちは悟らなかったということだと考えられます。

## 5. 上げる

8:28 イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。

「人の子を上げる」人の子とはキリスト、すなわちメシアの別称です。それを「上げる」時、ユダヤ人たちはイエシュアを遣わした御父、アーヴすなわち神の国を知るようになるのです。ここで「上げる」と訳されているヘブル語アーラー(עלה)が聖書で最初に使われている箇所が創世記 2:6 です。

### 創世記

2:6 ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた。

この「湧き出て」と訳されているのがアーラーです。水が湧き上がり、全地を潤すように、イエシュアが上げられる、アーラーされることによって全地を潤す、すなわち全世界が、すべての国民がイエシュアを上立つ権威、つまり王とし、イエシュアという名の水を飲む、それを受け入れるその時、イエシュアが何であるかを知る、イエシュアを遣わした御父のご計画がどのようなものであるかを知ることが語られていると考えられます。全世界がイエシュアを受け入れる、イエシュアが全ての国々をすべ治める時、それはすなわち神の国、御国がこの地に建てられる時です。

8:29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」

イエシュアはひとり残されることはありません。いつも御父とともにあられます。先ほど語られたように「ふたりの証言は真実である」とモーセの律法に書かれているために、いつも真実な御方、アーメンである御方であり続けるためです。

## 6. とどまる

8:30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。

8:31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。

「信じることは、言葉にとどまることである」とイエシュアは言われました。ここで「とどまる」と訳されて

いるヘブル語はアーマド(אָמַד)で、創世記 18:8 で初めて使われています。



#### 創世記

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した子牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに給仕をしていた。こうして彼らは食べた。

これはアブラハムのもとを訪れた神の人に対して、アブラハムのとった行動について記されている箇所ですが、ここで「給仕をしていた」という言葉がアーマドです。口語訳や新共同訳では「立って給仕していた」と訳され、本来は「立つ、耐える」という意味の言葉ですが、そこには給仕する、つまり「神の人に仕える」という目的が示されていることが解ります。この神の人のそばにアーマド、立って仕えるアブラハムの姿に、御国の王であるイエシュアと、そばに立つアブラハムの、その子孫であるイスラエルの民の型、すなわち神の国の型を見ることができます。

## 7. 真理

8:32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

「真理」と訳されているヘブル語、エメト(אֱמֶת)が聖書で初めて使われるのが創世記 24:27 の記述です。

#### 創世記

24:27 言った。「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。主はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」



これはアブラハムの最も忠実なしもべエリエゼルの言葉です。彼は主人からイサクの花嫁を探し出して連れて来るという大役を命じられ、それが神様のアブラハムに対するエメト、真理のゆえに成し得たことを知って語った言葉がこれです。つまりエメトには「途中つつがなく」つまり予定通り、計画通りにことが進められ、目的である「家に導かれる」こと、すなわち神様のご計画のプロセス、スタートからゴールまでの全行程を指し示す意味があると考えられます。そしてそのゴール、目的は、あなたがた、すなわちイスラエル、ユダヤ人を自由にする、すなわち奴隷の状態から解放するということです。

## 8. 罪の奴隷

8:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどのように、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」

「あなたがたを自由にします」という言葉は、裏を返せば「あなたがたは奴隷だから」と言っていることにな

ります。ですからおそらくそれを聞いたユダヤ人の指導者たち、律法学者や祭司たちには腹立たしく感じられたことでしょう。そこでイエシュアは次のように補足説明をされます。

8:34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。

「罪の奴隷」罪を犯すという意味のヘブル語ハーター(אָטוּר)が聖書で最初に使われるのが創世記 20:6 にあります。

#### 創世記

20:6 神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知っていた。それでわたしも、あなたがわたしに罪を犯さないようにしたのだ。それゆえ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。

ここで罪を犯す行為として示されているのは、ゲラルの王アビメレクが、アブラハムの妻サラを彼の妹だと思い、召し入れること、つまり自分は正しいと思っていたが、実際は「騙され」ていて他人の妻と「姦淫」を犯すこと、罪を犯すことを指し示しています。つまりハーター、罪とは騙されているために、罪を犯しているのに自分は「正しい」と思い込んでいる状態を指し示しているのです。そして「姦淫」とは 8:3~11 に記されていた「姦淫の女」の出来事で述べたように、偶像礼拝、イスラエルの罪を象徴する言葉です。

8:35 奴隷はいつまでも家にいるのではありません。しかし、息子はいつまでもいます。

8:36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。

ここで「いる、います」と訳されているヘブル語はヤーシャヴ(בָּשָׁב)で「住む、住ませる」という意味の言葉です。息子、すなわち神の御子イエシュアは「いつまでもいます」つまり永遠に住むことになる神の国、御国において、罪の奴隷は永遠に解放されるのです。罪を犯すことから永遠に解放され、自由であり続ける、それはすなわちもう二度と罪を犯すことがないということです。

8:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。

8:38 わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」

ここでイエシュアはご自分の父である神様とは別に「あなたがたの父」という異なる存在がいることを示されます。この「あなたがたの父」はイエシュアの言葉を拒み、殺そうとしていると語っておられます。これは後述する「偽りの父」である悪魔を指し示しています。

## 9. アブラハムのわざ

8:39 彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。

8:40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。

ユダヤ人たちに対し「あなたがたの父」つまり悪魔が父であり、アブラハムではないとイエシュアは言われます。ここでイエシュアは「アブラハムのわざ」を行いなさいと語られました。ではそれは一体何なのでしょう。これもやはり一番最初にアブラハムがしたことを考えるべきです。彼が神様に従って最初にしたこと、「アブラハムのわざ」とははこれです。

#### 創世記

12:1 主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

12:4 アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。

「主がお告げになったとおりに出かけた」つまり「神様に従って旅をする」、これがアブラハムの最初のわざです。このアブラハムのわざについて、ヘブル人への手紙がこのように語っています。

#### ヘブル人への手紙

11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

11:10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたので、その都を設計し建設されたのは神です。

11:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。



神様が設計し、建設される、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望む、はるかにそれを見て喜び迎える、まさに「御国が来ますように」という祈りを体現した生き方「旅人、寄留者」としての生き様が「アブラハムのわざ」と呼ぶべきものだと考えられ、そしてこれこそが行いを伴った「信仰」と呼ぶべきものだと思います。

私たちは今、このアブラハムのように、信仰を、御国を待ち望む思いを、祈りを、自分に与えられた人生の中に、生き方、生き様としてどのように表せているでしょうか？考えてみる必要があると思われます。